戦時期の在華日本紡績同業会理事の回顧

――堤孝氏（鐘紡、在華日本紡績同業会）インタビュー――

1974 年 8 月 28 日　東京都下北沢の自宅にて

聞き手：桑　原　哲　也
校　閲：富　澤　芳　亜

【解説】

このインタビューは，1930 年から 35 年までを鐘紡（公大紗廠）にて営業を担当し，35 年から 45 年の敗戦時まで在華日本紡績同業会の理事をつとめ，その後の 48 年までは，中国紡織建設公司に留用された堤孝氏の経験を，当時，神戸大学大学院経営学研究科の桑原哲也氏（現福山大学経済学部教授・神戸大学名誉教授）が聞き取ったものである。

堤氏は 1887 年 3 月に神奈川県横浜市で生まれ，1908 年に東京高等商業学校（現一橋大学）を卒業した後に，商社横浜生糸株式会社の棉花部に入社した 。11 年に同社のニューヨーク支店に転勤し，12 年からは棉花取引の修得のために南部のアメリカ人棉花商社に 3 年間の駐在をし，16 年の帰国とともに大阪支店次長（綿花，綿糸布部主任）に就任した。17 年に中国各地を視察し，その結果として開設された漢口支店長を経て，18 年に新設の上海支店長に就任した。19 年に綿花収買のためにアメリカのテキサス州ダラス支店が設置されると同支店長に転任した。しかし 24 年の関東大震災により，横浜生糸は本社の全潰，所有生糸の焼失などの被害を受け，しかも裁判でこれらへの保険も無効とされたために破綻した。そのため，堤氏は 28 年に鐘紡へと転じ，30 年に青島公大紗廠営業部長に就任した。その後，上海公大紗廠営業部長などを経て，津田信吾公大紗廠社長の推薦により 35 年 7 月から在華日本紡績同業会理事に転じ，後に華中棉産改進会副理事長，上海工部局委員，上海電力公司

顧問，上海日本人居留民会議長などを兼任した。40年には在華日本紡績同業会上海支部長を船津辰一郎より引継ぎ，42年には日本側紡織業者を代表して棉業統制委員会副主任委員に就任し，45年の敗戦を上海で迎えた。46年1月に奚玉書[1]の招請に応じ第六区綿紡織同業公会嘱託となり，同年7月中国紡織建設公司（以下，中紡と略称）清査小組（清算小委員会）に留用され，48年に上海から引き揚げた[2]。

こうした経験談の中には，実際の営業活動から見た中国市場の特徴，在華紡における沖縄出身者の現地採用，日中戦争中の華中棉産改進会の活動，鐘紡本社と公大紗廠の関係，中国紡織建設公司への留用の経緯など，当事者として知りえた貴重な事実も含まれている。

インタビューが収録されてからすでに38年余が過ぎており，音源のテープには劣化，テープの入れ替えなどによる音声の中断があり，聞き手の桑原哲也氏とともに適宜語句を補うとともに，インタビューに登場する人物，事象などについても注を附した。またインタビュー中の「支那」などの用語は，改めずにそのまま収録した。

なおインタビューに同席している女性は，堤氏の娘さんと思われる（富澤芳亜）。

鐘紡（公大紗廠）および在華日本紡績同業会について

○桑原　まず，お尋ねしたいのですけれども，鐘紡へ入社されたのは何年ですか。

○堤　昭和3(1928)年だと思うね。

○桑原　そして在華紡同業会の役員になられたのは。

○堤　昭和10(1935)年。鐘紡を辞めて，10年から終戦まで。

○桑原　理事で。

○堤　はい。

○桑原　鐘紡におられたときは，鐘紡の上海製造絹糸におられたのですか。

○堤　最初は神戸の営業所にいて，昭和5(1930)年に青島へ行ったのです。それから7(1932)年に上海に行った。上海で，昭和10(1935)年に当時の社長の。

○桑原　倉知（四郎）[3]さんですか。

○堤　いや。それは上海のサイドですが…。

○桑原　津田信吾[4] さんですか。

○堤　津田信吾さんに昭和10(1935)年に上海の在華日本紡績同業会というのに推薦されて行ったわけです。鐘紡を辞めてですよ。

その前は，私は商社マンです。

○桑原　どこの商社ですか。

○堤　横浜生糸という。横浜で日本の生糸を輸出する会社です。

○桑原　明治43(1910)年に入られたわけですね。

○堤　41(1908)年ですね。41年に卒業したのだ。

○桑原　41年ですか。東京高商ですね。

○堤　それで，そこの会社に私が入ってから，綿花部というものができたのです。それは(横浜)正金銀行の要求で，生糸を輸出するのに対して，何か輸入してもらいたいと。そうしないと為替のやりくりがしにくいから，できるだけ，そうしてくれということで，綿花の輸入，特に米国綿花の輸入ということを始めたわけです。

その時分，まだ日本の貿易は商館貿易であったわけです。それで正金銀行は，できるだけ日本の商社，あるいは日本企業にそういう輸出入を移して，日本の独立を図ろうというのが正金銀行の設立の趣意ですから，そこで正金が非常にバックしてくれて，綿花の輸入が始まったわけです。

私は，まだ学校を出た時期のことで，アメリカに行かされて。アメリカは，もう当時から生糸の輸出では一流で，すべて基礎はできているわけです。そこに綿花をつけるわけですから，私が行って3年間，アメリカのテキサスのダラスというところで綿花の研究をしたわけです。

そして帰ってきて，本当に綿花の輸入が始まったわけですね。しかし，それまでは商館貿易と同じことで，アメリカの綿屋から買って，取り次いで輸入していた。それを今度，自分たちの手で綿を買う。当時それを直買と言ったものですね。直接，買うという意味で。これは余談です。

そこで大正12年の関東大震災で，横浜の本社が輸出する100俵の生糸を焼いてしまったわけです。そして，それは保険にかからない。だから会社はつぶれて，私はアメリカから引き揚げて帰って来たわけです。そして半年ほどして，鐘紡に入りました。

鐘紡に入ったのは，鐘紡に井上(潔)[5] くんというのがいたから。あれは私と一橋の同期で，この井上くんが鐘紡に来いと言ってくれて。その

当時，専務だった前山（久吉）さん[6]という人も一橋の出の人だったので，前からよく知っていたものですから，神戸の営業部へ入ったわけです。

○桑原　この方ですね。

○堤　ええ。その井上くんの庇護で，新しいところに入ったわけです。そして昭和7(1932)年には上海へ行って，昭和10(1935)年に鐘紡は辞めて在華紡に入った。

在華日本紡績同業会というのも，私は実際，どうしてそれが出来上がったのかということは知りません。出来上がってやっているところに，私は行けと言うので行ったのですから。

そこでもう一つ，鐘紡に関する問題ですが，鐘紡は武藤（山治）[7]さん，津田さんというふうに（社長はひきつがれて）来たわけです。その経営方針は2人とも同じですが，武藤さんが表に立っていて，実際は津田さんが中でうまいこと操っていたというのが本当だと思います。そして武藤さんが亡くなって，津田さんが社長になったと。べつに経営方針が表面的に変わったわけでもなし，何も目立たなかったと私は思います。

私が，昭和の3，4(1928，29)年ごろに鐘紡に入ったときは武藤さんです。津田さんは，いまの淀川工場の工場長をしていた。それで会議などでは，しょっちゅうお会いしていたわけですね。

倉知氏というのは，慶応の津田さんと同期なのです。それで2人は両方が，自分が武藤さんの一の子分だと思っていたので，いわゆるライバルだったわけです。そこで結局，津田さんのほうが，人間が上か，あるいは人間が悪いか知らないが，とにかく内地の武藤さんにくっついてしまって，倉知さんは，どちらかというと支那に追いやられてしまったという結果が出てきたわけです。そこで支那の鐘紡の活動を促進して，拡大して，自分の位置をうんと上げようとしたのが倉知氏なのですよ。

そういうような裏面的な関係は人には言えないのですが，いまはみんな亡くなってしまったから何ですが。そういうものが頭にあれば，問題がだいたいわかってくるだろうと思います。

○桑原　では，倉知氏は何年に中国へ行かれたのですか。

○堤　さあ。私が倉知氏という人に初めて会ったのは，私は鐘紡では新米ですから，本当に会ったのは青島へ行ってからです。青島の工場というのも，その倉知氏の管轄ですからね。

○女性　昭和5(1930)年です。
○堤　それは昭和の3(1928)年ごろでしょう。そのときに初めて倉知氏という人に会ったのです。
○女性　青島に行ったのは昭和5(1930)年ですね。私が小学校のときですから。
○堤　倉知氏はその時分，上海の大将であり，また青島の大将であるので，しょっちゅう行ったり来たりしていました。
○桑原　それで倉知氏は，上海製造絹糸の。
○堤　ええ，社長。本当の社長は中国人を立てているけど。
○桑原　王一亭[8]という人ですね。
○堤　そう。その人は中国で有名な絵描きさんですよ。それを連れてきて，社長にして，つまり当時の日本の海外進展の一つのかたちですね。表面は中国，相手を立てて，実際は何もやらない，金だけくれていたと。それが，はたして良かったのか悪かったのか，いまとなると悪かったということになるのだけど。
○桑原　どうして,それが結果的に悪かったということになるわけですか。
○堤　つまり，あめを食わして何もさせないじゃないかということがわかってしまったわけですね。絵描きさんを連れてきて社長にしたのだから。せめて，そうでなければいいけれど，絵描きさんだったということは，あまり感心できないわけです。
○桑原　はい。
○堤　まあ，それは別として。
　いま，だいたいの総論は終わったと思うのですが，ここにあなたの質問で，鐘紡の海外活動のやり方の特徴について，武藤氏と津田氏の政策かどうかということ。
　つまり鐘紡の仕事というのは，綿糸紡績，絹糸紡績，染色。
○桑原　はい。淀川(工場)ですね。
○堤　加工,生糸工場を持っていた。それから絹布の工場も持っていた。そして絹の靴下に女のストッキング，ああいうものの工場もあった。そういう特殊な仕事をしていたので，これについて，どういう方針でやって，どういう計画が実際になされていてと。そういうことは，私は日本にいませんでしたからわかりませんし，これについて，あなたが必要な

らば，井上くんに聞いてもらえれば。実際にやっていたのは井上くんなのですよ。
○桑原　内地ではですね。
○堤　これは若いけれどもしっかりしていて，津田さんとか何だとか，みんな偉いのは偉そうにやっていたけれども，実際のもとは井上くんが握っていたのですよ。井上くんは利口な人で，頭もいいし，黙っているけれども，すべてをちゃんと握っている。そして大きな間違いのないように全体を動かしていた。その点では非常に大事な人です。
　それから，その他の会社の海外活動の特徴。これは取り立てるほどの。その他の会社ということは紡績会社ですね。
○桑原　ええ，そうです。
○堤　他の紡績会社は，ただ鐘紡の成績を見て，だいぶうまくいくのだなということでフォローしてきたと，単に私はそう見ています。他の社は，独創的なことは一つもやらないで，鐘紡の武藤さんがああいう理想家ですから，武藤さんのやってきた仕事を，津田さんとか井上くんとか，そういう人たちが全部サポートして出来上がった，その成績を見て，俺も行こうというようなことであったと私は思います。海外と言っても，まだ当時は支那，中国だけですから。これには，私はクエスチョンマークをつけております。

鐘紡から見た他の在華紡績企業
○桑原　内外綿が一番早くやっておりまして，それのまねをしたと。
○堤　内外綿については，あなたが内外綿というのがどういう会社だったということを知っているかどうかなんです。
○桑原　ええ，あれは，初期には綿（花）の取引の会社なのですね。
○堤　内外綿というのはインド綿の輸入者だったのです。いわゆる商館貿易のようなかっこうであって，川邨（利兵衛）[9] さんという人が偉い人で，これが上海に，いわゆる日本人が綿糸紡績を開く端緒を開いたわけですね。
　この人は，主としてインド綿の輸入を日本にしていて，それで儲けた金でつくった。そして，これは私の推定ですが，日本の中に紡績をつくったのでは，自分が綿を売っていたお得意さんの邪魔になると。それなら

ば，いっそのこと中国の上海へ行って，そちらで紡績をやれば，別段，日本の紡績の邪魔にはならないし，従来の綿花輸入のお得意先にも顔が立つし，商売ができるという立場であったと私は思うのです。そんなことを誰かから聞いたわけではないけれども。それが内外綿のスタートだと私は思います。

ところで，このあなたの，進出計画に着手したのが大正6(1917)年，7年，8年，10年，11年とあるけど，私はちょっと年が違うのではないかと。大正の6年といったら，だいぶ前のことだ。これは何かによっているのだと思うけどね。

○桑原　これは新聞の記事なのです。大正6年の新聞に，尼崎紡績と大阪合同紡績が計画中であるというのが新聞の記事なのですね。

○堤　ああ，では実現しなかったのだ。

○桑原　いえ。それで尼紡は大日本紡になりましたし，大阪合同は同興紡というのを別会社でつくりましたし。そして7(1918)年の大日本紡，日清紡，豊田紡というのは社史に書いてありまして。8(1919)年の鐘紡，富士紡というのは，社史というか，鐘紡は社史がないですが，文献によりまして。

○堤　日華紡は富士紡だね。

○桑原　はい。

○堤　どうも，こんなに古いように思わないのだがね。私のあれからいうと，このへんの年がちょっと違うように思う。

○桑原　例えば，どういう。

○堤　もっと後だと思う。

○桑原　もっと後というのは大正の終わりごろと。14, 15(1925, 26)年と。

○堤　ええ，少なくともね。それで内外はいつですか。

○桑原　明治42(1909)年計画着手，44(1911)年操業開始です。

○堤　大正6年，7年，このころには私は上海にいた。

○女性　そうなのですよ。私が8年に生まれるときまでいたのですよ，上海に。その前にずっと。

○桑原　それは横浜生糸の関係ですか。

○堤　その時分は，内外のほかは日華紡しかなかったのです。

○桑原　これは操業開始ではなくて，計画。社長が腹の中で考えた一番

初めの年なのです。例えば，大日本紡の操業は，青島では大正10(1921)年10月です。だいたい大正12年に操業，工場を完成しているということで，操業はずっと後になるわけですけれども。

〇堤　それから大日本紡と鐘紡に比較して，東洋紡がなぜかということですが，これは私の個人的見解ですが，この日本の紡績が中国に活動を始めた時分は，大日本紡も鐘紡も大きいけど，東洋紡はまだそんなに大きなあれになっていなかったはずなのです。東洋紡というのは，本当は非常に古い会社なのですよ。おそらく大阪で一番初めにできた紡績です。

〇桑原　大阪紡ですね。

〇堤　ああ，そうそう。それがだんだんに合併して大きくなってきて。私の考えでは，あの時分…。

(テープ入れ替え)

〇桑原　菱田（逸治裕豊紡副社長）[10] さん。

〇堤　私のこれは庄司(乙吉)[11] さんのあれですよ。当時はまだ中紡績だったということで，外に力を出すだけのあれがなかったと私は判断している。当時の責任者で一番偉かった人を，私はよく知っているのですよ。もうとうに亡くなった。一橋の先輩だったから，私も若いときはよくお世話になったのですが，そういう関係の感じが。いま言ったように，まだちょっと伸びるだけの力がなかったのだと私は判断しています。

それから，なぜ中国に日本の紡績が飛び出していったかということですね。それは欧州大戦，第一次大戦。これは大正6，7(1917,18)年ごろかな。

そのときに英国品，綿製品が中国にどんどん入ってきた。イギリスはインド紡績の製品を中国に入れるということで，自分たちはジャーディンの紡績工場[12] を一つつくっていますが，それ以上はつくらないで，インドの製品や自分の本国のあれを押し込むと。また中国の金持ちに，いわゆる中国紡績をつくらせて，そこへ綿を売りつけると。つまり一種の何て言うか，いわゆる商館貿易のあれですね。

そこで欧州大戦が始まって，そんなことをしていられなくなってしまったのです。その空き巣狙いに，日本の紡績がつくったものを初めて出したわけ。そこで日本はどうしたかというと，これは井上さんなんかに聞いたらわかりますよ。井上さんなんかは，実際にやった仕事だから。

綿糸でも綿布でも何でもかんでも，イギリス品をそのままそっくりつくったのです。

〇桑原　まねをしたわけですね。

〇堤　まねをするどころではない。微細に研究して，例えば織布でも縦横の織りの数から何から，糸のよじれ，そういうものの細かな点から，布の端とか，いろいろなところを微細に研究して，そっくり同じものをつくったのです。そうして，それを売り込んだ。それは安くして売り込むし，もうよそから来ないですから，それは日本のものがどんどん行っちゃった。

それで私は当時，上海の店から漢口の店に行ったり来たりしていたのですが，その時分に綿糸やら綿布が，日本の日清汽船の船に，うんと積まれて，揚子江をずっと上がって，各港に降ろす。見ていると全部日本品です。大したことになったなと。いつまで続くかしら，欧州戦争がすんだら，すぐにこれは取り戻されてしまうのではないかという心配をしていたことを覚えています。

ところが，欧州戦争がすんでからも，なかなか欧州の秩序は戻らないで，そんな昔のことはできないということがわかったので，日本は安心したのです。まだ当分，大丈夫だろうと。

そこで日本は中国を説いて，中国に紡績をもっと大きくしなさいと。そして，輸入を防いで国内で生産しなければいけないと言って，中国政府をおだてて，北京会議[13]というのを開いたのです。それはいつだったか，日はちょっとはっきりしていませんが，3カ月ぐらいかけて北京関税会議を開いた。鐘紡の井上くんは，その事務局長でそこへ行っていますから，このことについては本人が詳しく知っています。

この会議で武藤さんが，こういうふうに立ち回ったのです。中国をおだてて，関税を上げさせた。関税を上げて，収入を図れということなのです。それで中国は，たいそう結構だと，それに賛成して上げたのです。この武藤さんの腹のなかは，関税を上げておいて，自分たちは中国の中に入ってしまおうと。中国の紡績と一緒になって仕事をすれば，関税の障壁があるから大丈夫だという計画だったのですね。

それで，それまでに製品の種類，荷造りの仕方，長さ，何もかも，みんな英国品どおりのものをつくって，日本はどんどんやっていく。そし

て日本の紡績が，だんだん中へ入っていったわけ。それは関税に保護されているということで，日本の他の紡績も安心して出てきたわけですね。そこで，いわゆる在華紡の繁栄が出てきたわけです。

在華紡の経営と日本の国策との関係

〇堤　そこで問題は，なぜ上海とか青島あるいは天津に紡績ができたかということなのです。

〇桑原　天津は昭和10(1935)年以後の話ですね。

〇堤　これは軍の力です。

ところで，あなたの，何か国策的に国や軍部の助けを得て，日本の紡績が活動を始めたのではないかという質問ですが，私としては，それはノーと言うのです。

それは，いま言うように，日本の紡績自体が国家の世話にならずに，日本自体の経済力で発達してきた工業，企業ですね。その伝統で海外に行っても，いま言うとおり，大変人の悪いやり方かもしれないが，関税を上げさせて，自分がその中に入って，その関税の障壁の保護を受けてやっていくというやり方。それは日本政府も全然あれ（援助）がなかったとは言えないかもしれませんが，なにもお先棒を担がされたとかというような意味では全然ない。むしろ国策のほうが後からくっついてきたのだというのが私の見解です。

そこで上海，青島，それからのちには天津。これは海港であるということが一つの条件です。海の港であると。それは，昔からインドとかヨーロッパ，その他から輸入されていた綿製品，綿織布は，みんなその港から入っていた。そうした港を軸としたマーケットというものが，国内にずっとあったわけです。そして，その海の港であるということは，日本人のような，要するに外国人にとっては比較的仕事のしやすい場所ですね。それから，何か事があっても，いわゆる海軍さん[14]なり何なりがいるという，潜在的なあれもあったと思います。そこで上海と青島。

上海はご承知のとおり，共同租界というもので，中国であって中国でない土地ですね。そこにおのずから，中国から離れた一種の独立国があったわけで，そこに入っていれば，まず心配がなかろうと。生活もそう心配はいるまいというようなことが基本観念で，そこに工場ができたとい

うわけです。

それから青島のほうは，前にドイツとの戦争（第一次世界大戦）で日本が青島を占領していたと。そこで日本の勢力というか，何かが植え付けられていたのですね。それは例の21カ条とか，いろいろな問題があって，一応，青島は日本のものではなくなったが，潜在的にあれがあったと。このへんの外交上のあれは知りませんが，青島の紡績というのは，青島郊外の，自動車で1時間ほど走った滄口というところで，そこの浜辺に沿って，いまの大日本紡の各社が，一番端が富士紡です。紡績の端から端まで自動車で行くと，30分ぐらいありますよ。大したものですよ。

〇女性　昭和5年に行きましたけど，すごいところですね。

〇堤　人は「阿房宮」[15]と言うくらいに大きなもの。そこは日本人にとっては日本のつもりでいたのですよね。青島のまちへ行っても，日本語はむろん通じるどころではない。もう日本とちっとも変わらないといったような状態が。そういうところであったから，日本の紡績もそこへ力を入れたわけです。

それから，上海は南のほうの貿易の，つまり商売の中心ですよね。これは長江を挟んで，ずっと奥までいっていると。それから天津は，天津から奥にずっと，満洲から蒙古のほうまでが天津の押さえている筋なのです。それで青島というのは，ちょうど両方のマーケットのあいだに，細い一つの筋があったわけです。ですから，本当は綿製品から言うと，青島はどうでもいい。できたものを天津に回さなければいけないのです。ですから，ほとんど天津に輸出されたものなのです。そして，それから奥へ入った。

それで，これは一つの参考ですが，品物は上海も天津も青島も同じものをつくっています。しかし行く先のマーケットによって，荷造りの仕方が違うのです。北のほうは梱包が小さい。それは綿布が，仮に50反を1ベール（bale＝梱）とするならば，天津向けは30反を1ベールとしたのです。それは奥地の運送機関の関係で，支那では奥地へ行けば，ラバというか，ロバというか，こんな小さな馬に乗せなければいけないから，俵を小さくしている。綿糸も同様に半分にする。そういうものが必要であったのです。

だから南のものを，急に北に売ろうと言っても，奥へ持って行けない

のですね。北のものならば小さいから，小は大を兼ねるかもしれないが，大は小を兼ねないという。そこでマーケットというものがひとりでに，ぴしゃっと相侵さない状態になっていたわけ。そして奥地，チベットあたりまで持っていくのに２年ぐらいかかるのですよね。

〇桑原　上海からチベットまで持っていくのに。

〇堤　ええ。そういう土地ですから，マーケットの値段というものが動かないのです。例えば上海で倍になっても，チベットに響くのは２年先です。だから響かないと同じことなのですね。したがって，マーケットというものが，ああいう綿製品のような一番投機的なものが，わりあいに工業製品として比較的安泰で，採算がかっちりしていたという事情があったのですね。それを日本の紡績がして，ますます乗り込んで，強大になってしまった。

そして，日本は中国の紡績をできるだけもり立てて，自分たちと一緒にやっていったわけです。そこで，なぜ日本の紡績が，どんどん大きくなっていったかというと，先ほど言った関税会議で，まず投資して大丈夫だということがわかった。

そこで当時，日本は明治時代から続いてきた紡績機械あるいは織機が古くなってしまったので，これをどうにかして新しく替えなければならない時代にきた。そこで，こいつの古いのを皆，中国の工場へ移して，日本は新式の新しい有力な，能率の高いものに置き換えたわけだ。大日本紡とか鐘紡とか，古くから大きくやっているところは，これをどんどんやった。東洋紡なんかは，どちらかというと，まだしにくい状態であったということですね。

そして中国でつくっている品物は，もとは日本の工場の機械でつくっていて，それを中国へ移したから，そのまま何もかも間に合うわけ。それで日本のほうはどうしたかというと，逐次，高級品に向かってきたわけです。また，その機械は今度の戦争でつぶされてしまって，今度は新しく，もっと能率のいい，ハイスピードの機械に替えたから，日本の紡績は世界で復活したわけですね。

私はこの点について，いま日本の各企業が海外に出動しているが，その点がどういうふうになっているのか。当時の日本の考え方は，古い機械を，ただみたいに捨ててしまうと，ただスクラップにしたのではつま

らないから，まず中国へ持って行ってやろうと。そして，これはお役ずみの品物だから，これから出る利益は別段望まないと。ある一定の配当を日本に取り上げると，残りの利益は，全部中国に還元しようと。これが当時の日本の方針で，各社とも，それには異存はなしに進んでいたわけです。

だからいくら儲けても，一定の配当しか日本は持って行かないのです。残りの金は全部中国で使うということで，だんだんあんなに大きくなっていったわけです。そして，だんだん進むにつれて，こんな古い機械ではだめですから，今度はそれをスクラップして，また新しい機械を日本から次々と置き換えて，日本はどんどん新しくなる，またこちらへ持ってきてやると，そういうことです。

〇桑原　この残りの利益を還元するという意味は，向こうで工場を拡張するという意味なのですか。

〇堤　拡張するとか，いろいろなことに使ったわけですね。紡績は主として，例えば社宅を建てるとか，あるいは土地を買って運動場をつくるとか，学校を建てるとか，いろいろ。むろん中国のためとはいえ，実は自分たちのためですけど，そこに永久な根拠を据え込んだわけですよ。そういうかたちが結局，日本の政府として，陸海軍を中国に押し込んでいくかたちになったと思うのです。つまり日本の民間が先に行って，警察は後から来て交番をつくったりしたというかっこうになったわけです。

それで一度，戦争中のことですが，海軍の上海の陸戦隊の将校といろいろと話したとき，彼らが言うのに，日本は北海（オホーツク海などでの漁業警備）でもって，北海漁業のために駆逐艦や軍艦とか，たくさんの艦艇を年々あそこに出していると。その費用は大したものだと。しかし上海へ来てみると，こんなに紡績が発達して，日本人が工業をやっていて，日本人もこんなにいる。なぜ日本の海軍は，もっと来ていなかったのだろうかと。そう言ったくらいの話がありました。

ですから，当時から日本の政府そのものは，できるだけ保護するということは考えていたでしょうけど，上海というところが特別な都会であるということと，そういう関係から控えていたのだと思います。それに日本から近いですからね。日本の佐世保から 10 時間あれば駆逐艦が来られるのです。そういう関係で遠慮していたのではないかと思います。

それでだいたい青島や上海との関係はおわかりになったと思う。
○桑原　はい。先ほどの上海からチベットまで２年かかると。
○堤　２年ぐらいかかるということです。
○桑原　そして，その上海での値段が，チベットに伝わるのが２年遅れるということで。
○堤　ですから相場の動きが，なかなか本当に響かないわけですよ。
○桑原　それはやはり青島から蒙疆[16]へ行く場合にも，そういう条件が当てはまる。
○堤　そうそう。１年以上，みんなかかるのです。少なくとも，だいたい１年かかるらしいです。なにしろ，牛だの馬だのラクダだのを背中に乗せて，ゴトゴト行くのですからね。
いまだからなのだが，青島牛[17]という牛肉があったのですよね。神戸の牛は青島肉だといった。この青島牛というのは，話によると，チベットのほうから子牛でもって，荷物を運びながら済南から青島へ出てくる。それで青島で肉牛として売られるときには，きちんと立派な牛になっているということなのです。
○桑原　青島の紡績の市場は，満洲，蒙疆で。
○堤　つまり本筋から言えば天津市場ですね。天津市場から入っていく。仮に青島から済南を経て，済南から黄河に沿って，ずっと陝西省のほうまで入っていくが，商売のもとはやはり天津です。天津の商売人がやっているわけです。つまり青島から近いところに出してくれというのがあれば，そういうふうに出すと。
○桑原　立地条件としましては，青島よりも天津のほうが，上海と似ているから。
○堤　そうそう。それに古い貿易港であって，そこには内地市場との関係が深くつながっていると。そういうことが天津の強みなのですね。
それで先ほど言ったように，天津と上海のマーケットで，品物を片一方から片一方にやろうと言っても，中身は同じでも，運ぶうえから言うと，ちょっと困るわけなのですね。だから漢口のほうへずっと上がって行った品物が，北京のほうへ，横のほうへずっと行くには行くけれども，天津のマーケットを脅かすようなことは絶対にあり得ないわけなのです。
そういうふうに，中国という国が大きな国であって，そこには山河あ

りで，いろいろルートが決まっているわけですね。そのルートをたどる以外には商売はできないのです。それから中国では，ご承知のとおり，現在もあると思いますが，市が立つわけですね。川原に村の市が立つ。毎月何日に立つということで決まっている。そこに，こういう綿商がみんな出して売っているわけです。

〇桑原　そうすると，初めに日本の紡績が天津につくっても，立地条件としては悪くはなかったのですけれども。

〇堤　いけるはずなのですが，青島というところが，日独戦争（第一次世界大戦）の関係で日本の占領下にあったということもあって，日本人には天津より青島のほうが安心であるというわけですね。投資家というものは非常に臆病ですから，それこそ石橋をたたいてからでなければやらないと。それで青島と天津とどうだと言ったら，それは青島ならやれるということが。

　それで一人がやれば，みんながやると。内外(綿)なら内外(綿)がやると，みんながそれをまねて，青島に集まってきた。紡績も，自分一人でやるよりは，みんなたくさん仲間を連れて来たほうが安心だから，おまえも来い，おまえも来いと言っては，土地を世話するとか，いろいろお互いが助け合ったわけですね。

〇桑原　そして，まねをするということは，自分が失敗しても，相手も失敗するのだと。

〇堤　共同戦線ですからね。もし仮に馬賊が攻めてきたとしても，共同で防ぐと。ですから青島の工場は，馬賊が攻めてくることを予想して，きちんと塀ができていた。工場の囲いというのは，まるで城壁ですよ。

中国市場での営業

〇堤　そこでもう一つ，商売上の関係で見逃すことのできない一つの問題は，ブランドという。中国市場というのは，要するに開港地以外の，つまり田舎の，内地の国内市場ですね。ということは，消費者相手ですよね。この連中なり消費者はブランドしか知らないのです。そのブランドは，日本の紡績がつくったのか，英国の紡績がつくったのか，支那の紡績がつくったのか，それとも誰か土地の人が別につくったのか，そんなことは関係ない。ブランドだけしか見ていないわけだ。

（音声中断）
○堤　中国人は，メーカーが誰であろうと，そんなことは関係ないのですよ。ブランドだけしか頼っていない。

そのブランドというのは，各社が決めているわけですね。例えば鐘紡でしたら,「双飛龍」という。竜に羽が生えていて,それが２つ向かい合っている「双飛龍」というブランドがある。これは「公大」と中国流の名前をつけていますけれども，買っている人は，これが鐘紡だとか，そんなことは知りません。「双飛龍」が好きだから「双飛龍」を買う。こういうわけです。

そこで一番困るのは，田舎の小さな村へ行ってみると，こういうことになる。反物を売っているところに行ってみると,「双飛龍」の綿布の端が切って下げてある。そして，そのところに反物が並んで，あたかも「双飛龍」の反物はこれですというわけ。これは違うものなのだ。安物が置いてあるのですよ。そういうことをさせているのです。

それは買う人も,「双飛龍」なら「双飛龍」がくっついたものを買わなければいけない。ところが綿布というのは妙なもので，反物の最初のところにブランドがあって，これをほぐさないと切れないわけです。切ってしまったら，それでおしまいになるわけ。だから本当に買うときになると,反物をしっかりほどいて,一番端から切って売ってくれるわけです。

しかし，このブランドの威力というものは，大したものですよ。日本だとブランドとして嘘のものを売るでしょう。日本では本物はいくら，偽物はいくらということは言わないですよ。できるだけ，みんな本物のような顔をして売ろうとする。これは日本人の良くないところですが，中国人はそういうことをしないのです。偽物は偽物，本物は本物で売るのですよ。

○桑原　「双飛龍」の偽物がたくさんあるわけですね。だけど偽物は偽物として。

○堤　偽物として売るのです。

ということは，日本人というのは，あまり品物を見て買わないのです。中国人は，そんなばかなことはしません。根掘り葉掘り，引っ張ってみたりして，よく品物を調べてからでなければ買いませんよ。それは，まやかしものをつかまされることがあるからですね。日本人は，まやかし

ものをつかまされるなんてことは，まあないが，あったって大したことはないという頭なの。向こうの人は，そういうことを非常にシリアスに考える。

〇桑原　例えば，「双飛龍」の偽物を中国の機屋がつくったら，法律的に問題が生ずるということはないのですか。

〇堤　ないのです。それは中国の民主主義というか，つまり，だまして成功しても，だまされたほうもだまされたのだ，しようがないという，いわゆる「没法子」（メイファーズ，中国語で「仕方が無い」）でものを解釈していくと。売るほうも，ごまかしてうまくいったら，それでおしまいと。だから中国では，ある意味において徹底的な個人主義であり，お互いに自分がへましたのならしようがないと，自業自得だということが，すべてを支配していると思われますね。

それから中国人は，協力というか，お互いが手を携えて何でもやっていくという，共同してものをしていくということに，非常に力を入れているように思います。上海なんかで見ていますと，こういうふうに橋があって，例えば綿布を積んだ車を 4, 5 人で持ってくる。これは太鼓（橋）になっているから簡単には上がらないですよね。そうすると 10 回ぐらい，途中まで車を持って行っては降り，また，えいほ，えいほと，こうやる。つまり，みんなの力が出そろうまで待っているわけです。みんなの力が出そろえば，この山は越せると。越すまで何度でも引き返して，さあ，また行こう，それ行けと言ってやっているわけ。それで一人も力を出さないのです。みんなの力が出るのを待っている。

日本人は，これができないのです。誰か一人がはちまきなんかをして，号令でもって，それいけ，俺がやるぞと言ってやるものだから，それはなんとかなるけれども，えらく骨が折れる。中国人は，いま言ったように，みんなが必要を認めて，どうしてもこの山を越さなければしようがない，このままでは明日までどうにもならないではないかと，お互いに観念して，みんなが全力を出すときまで待っているのです。そうして，そこで，やあっと。そういうことが万事にあります。

マーケットの商売が，そのとおりなのです。一人が買えば，みんなが買う。一人が買わないと誰も買わないといったような。では理屈があるのかと言えば，別段，理屈も何もない。今日買わなくても明日買えばい

いのだ，今日，俺だけ一人買ったってしようがないと，こういうような考えですね。それから，自分一人いい子になろうということは，結局，永久的には決して利益でないのだということを，よく心得ているのです。

そのようないろいろな心理的な問題が，商売をするうえで，非常に関係があるのです。そこでブランドというものが非常に役に立ってくる。いまの日本の紡績（旧在華紡の工場）は，中国に取られてしまって，そのまま運転していますね。それは，このブランドのためなのです。われわれの持っていたブランドを，そのまま使って，同じものをつくって売っているのです。

〇桑原　いまでも「双飛龍」はあるのですか。

〇堤　うん。それで日本人だったら，鐘紡の工場でできたものは「双飛龍」，それから大日本紡のつくった，同じものだけど，何て言うか。

〇桑原　とかがありますね。

〇堤　そういうマークがある。それは鐘紡のほうが余計に売れるから，そちらのやつをやめて，向こうも「双飛龍」をすり込んだら，それで売れるわけですよ。しかし，そういうことをしないという，いわゆる商業道徳は非常に堅いのです。

〇桑原　日本の紡績業者の商業道徳も非常に堅い。

〇堤　いや，それはそうですが，中国になってからでも。中国は日本の紡績を，みんな取ってしまったのだから，鐘紡の「双飛龍」もあるし，大日本紡のもあるし，豊田のも，日華紡のもある。品物は本当のことを言うと同じようなものなのです。ブランドが違う。

そうすると，本当は「双飛龍」が一番よく売れるのです。それが中国の奥の奥まで入ってしまった。だから，もっと買いたいという人が出てくる。そうしたら，こっちのやつをすり替えればいい。会社は同じですよ，中国の紡績だから。ただ元が鐘紡だった，大日本紡だったというだけ。それでも，それを混同しないです。守っているのですよ。

しかし品物というのは妙なもので，同じものをつくっているのだけど，どこかに違うところがある。ちょうど親子，兄弟の家庭で，兄貴と弟が家を別々につくると，同じはずなのに，どこかで違うところがある。そういう違いがあるのです。そういうことは，中国人は非常に敏感です。だからブランドをそのまま，勝手なまねをしないでやるのです。

ブランドがどうのこうのというのは，文明社会ではないですよね。品物が本当によくなければだめなのですから。ところがブランドというのは，品物が非常にいいから，ブランドなしで売れるかというと，そうではない。やはりブランドでないと。つまり相手の程度が低いですから，どうしても，それに頼ることになる。

再び在華紡の経営と日本の国策との関係

〇堤　そして国策として，つまり経済侵略をインテンショナリーに，紡績がその先駆になったということだけは，私は否定したいのです。結果的にはそうなったけれども，私たちが仕事をしていた時代には，これは一種の外交辞令でしょうけれども，中国人と非常に仲良くしていた。そして今度の事変は，日本の軍部と中国の軍部が戦争を始めたのです。日本の政府と中国の政府は，そんな意思は絶対にないのだということを主張していました。私も，そのとおりだと思います。

そういうことから，私は日本の紡績が先頭に立ってやったのではないのだということが言いたいのです。これはいろいろ史家の見るところによって違うと思いますけれども，私の実感からは，たしかにそうなのです。

〇桑原　そこで満鉄のように，資源を求めて出た会社との違いということが。

〇堤　言えるでしょう。

資源を求めるという意味から言えば，それは日本に求めるということではなく，一方的としては，中国の人間，中国の労働力，それからマーケットにある綿とか，そういう原料品を買って，中国で工業を興すことが中国のためになるのだと。つまり当時，中国は非常に貧乏であって，ひどい生活をしているから，それを何とかしてやろうということが，そもそものスタートだったと思いますね。

それは配当を取ったけれども，配当以外の金は全部，結局，何らかのかたちで中国に還元されているはずなのです。この点が，いまの時代の海外発展に関係してどうなるかということですね。タイなんかでは，みんな吸い上げて，日本へ持って帰ってしまうと言います。私は，そういうことは日本人にはないと思うのですよ。ある一定の利潤は取るかもしれないけど，お金は全部，そこの事業につぎ込んでいるのだと思うので

すよね，日本でも。こんな金を日本へ持って帰ったって，大した金にはならないのだから，そこで使ったほうが有利なはずだと思います。そういう点がどういうふうに現在なっているのか，私にはわからないけど。

華中棉産改進会について

〇堤　それから，綿花栽培ということ。棉産改進会[18]というのができたのだ。これは戦争が始まって，昭和14(1939)年。上海に興亜院華中連絡所というのができたわけですね。そこに，いわゆる経済進出の一つになるのですが，綿花の栽培をやろうではないかという。日本に前から，農林省の関係で日本綿花栽培協会というものがある。その栽培協会の一つの事業として，華中棉産改進会というものをつくったのです。

これは在華紡績が紡ぐ数によって資金を拠出して，それと同額のあれを，内地にある日本の紡績が。中国の在華紡は別途の資本でやっていたわけですから，ある意味において，上海と合わせると二重になりますが，これも日本の紡績が紡ぐ数によって拠出した。それに，日本政府が興亜院を通していくらか補助金をくれて，そして民間の事業としてスタートした[19]。

そして，京都大学の農学部の教授と助教授と，それから鳥取砂丘の近くに鳥取綿花の協会があったのです。そこから技術者が6，7名，上海に派遣されて来た。そして上海郊外の大場鎮（ダイジョウチン）とか，あのへんに土地を買って，まず綿花の栽培を始めたわけです。

それはご承知のとおり，上海付近の綿花は非常に毛が短くて，紡績に向かないのです。製綿用の布団綿にはなるけど。そこで，あのへんで紡績の綿花になるような綿をつくらなければいけないということで，中国で言う徳字綿（とくじめん），英語ではデルフォスという，米綿種の8分の7インチぐらいの毛筋の普通の米国綿花の種をまいて，その綿の増産を図ろうというのが，この改進会の目的だったのです[20]。

それは，こんにちまで続いています。私はこの会の会長をしていたので，終戦のときに，すべての資料，すべての参考書，全部を中国に渡してやったのです。中国は非常に喜んでくれました。

それで終戦後，重慶から偉い人が上海に出てきたとき，私に会って言ったことは「日本の軍部は何一ついいことをしてくれなかったけれども，

綿花の改良，増産だけは確かにありがたいと思います」と。こう私に言いました。それは，われわれは民間の仕事だと言ってやったのですが，中国から見れば，やはり軍部がやらせたのだと。それは軍部がやらせたのでしょう。軍部が承知しなければ，そんなことはできないのですからね。これは日本の軍部のたった一つのいいことだった。

○女性　もともと中国には綿はなかったのですか。

○堤　あったの。それはたくさんあった。ただ上海近くはいいけど，上海から通州。通州（ここでいう通州は江蘇省の「南通」を指す）もわりによかった。

○桑原　その徳字綿というのは，どういう字を書くのですか。

○堤　「道徳」の「徳」です。どういうわけで徳字綿と言うのですかね。「デルフォス」というのは人の名前ですね。「デルフォス」という字を「徳」何とかというふうに訳すのではないかと思うのです。

　それで，とにかく現在は，この徳字綿というのが中国でどんどんつくられている。こんにちでは，アメリカから輸入しなくても，ほとんど間に合う。

○女性　みんな綿服ですからね，向こうの人は。綿（わた）ですけど，上は綿(めん)で，そのなかに綿(わた)を入れて着るのですよ，寒いところで。温かいものですよ。

○堤　中国(の人口)は今では8億とかというのでしょう。私たちが行ったときに4億5,000万から，まず5億と。その時分でも，中国の人間の住んでいるところには，必ず綿をつくっていたのです。これは，自分たちが着る布団綿にするのと，自分の手で紡いで糸をつくって，だいたい私たちのいた時分までは，中国はすべて自給自足で，自分で何でもつくっていた。

○桑原　その綿花の栽培は，昭和14(1939)年以前には，どこの会社もやらなかった。

○堤　やらなかった。中国はやっていました。中国の南京大学（当時は金陵大学）で，ある程度，いまのデルフォスを中心に，将来，改良・増産しようという計画を大学としてやっていた。

○桑原　その南京大学というのは，日本人。

○堤　ではない。蔣介石の時代，日本の占領前の南京大学。南京に綿花

の畑もあるし，いろいろなものがあった。あなたは綿花のことをどうか知らないが，綿花の種を取るジンニングマシン（繰綿機）というのが。
○堤　それで終戦後，われわれのところへ接収に来たのは，その大学の先生たちです。ですから話はよくわかってね。つまり自分たちの研究を，さらに日本がやってくれたということなのです。
○桑原　その昭和14年以前には，例えば，どこかの東(洋)棉(花)とか日(本)綿(花)とか，そんな会社が指導したというようなことは。
○堤　それはない。いまでも棉産改進会というのは，中国の今度の毛沢東政府でも現在やっているわけです。しかもその徳字綿を改良して増産しているはずです。それで，ある程度成功して，米綿をアメリカから輸入しないでいい状態になっていると私は聞いています。
　なにしろ，その時分から，また2億人も人間が増えているのですから，綿製品の需要は大変なものでしょう。終戦後10年間ぐらいは，中国は綿花が足りなくて，インドからインド綿を輸入していました。それが10年か15年たったら，ほとんど輸入しなくなった。
○桑原　だいたい中国の綿花は20番手までが。
○堤　20番手までなのですよ，本当はね。それから，あとは40番手になるような綿花が相当あるのです。
○桑原　中国にも。後の時代にはという意味ですか。
○堤　いや，前から。昔からあるのです。
○桑原　40番手も。
○堤　陝西綿と言って，黄河の奥のほうですね。黄河が曲がっていくところ。その黄河の沿岸に，立派なエジプト綿に匹敵するような綿花が，そこでできるのです。
　中国は何といっても広い国で，人間が多いし，そういうふうにピンからキリまで原料が出ますから，それをいまの周恩来あたりが，うまいことやって，こんにちよくなったと思います。だいたい周恩来は日本留学生ですし，日本のことはよく知っているし，日本でしたことは，いま決して悪いとは思っていないと思います。
　それで，この改進会。いまでも，この連中は年に1回，集まっています。当時22，23歳だった人が，いまはみんな60歳ぐらいになっている。だいたい70歳から60歳。若いところで54，55歳ですね。みんな農業

学校を出た人で，農業技術者です。これがいま，15，16 人，まだ生きていますが，だいたい関西で，あまり関東にはいません。4，5 人ですか。東京付近に 3，4 人。これが年に 1 回集まっています。

それで，このあいだも私がこの人たちに言ったのですよ。「君たちは若いから，いずれ近いうちに中国へ行く機会があるだろう。ぜひ行って，改進会がどうなっているか調べてこい」と。私が上海で別れた人は，その時分，大学の先生だった人で，まだ若い人たちですね。みんなアメリカの大学を出た人たちで，当時，まだ 30 歳ぐらいの人だったから，いまでも大学の先生でしょう。だから大学へ行ったら，すぐわかると。

私たちが持っていた綿花の畑というのは，上海と南京とのあいだ，方々にあったのです。南京も大きな城壁の外側で，相当な地面に畑をつくっていました。そこに綿花を栽培する学校を開いて，中国人の生徒が 20 人，30 人いたと思いますよ。むろん月謝を取るわけではなく，教えて，いくらか月給をやって，食わせて，住まわせていたわけだ。もっとも，そうしなければ来やしませんがね(笑)。そういう連中が，まだどこかに残っているだろうと思います。

それで綿花の問題は，私は中国としては解決ができたのだと思います。したがって，この改進会の事業が，ますます盛んになっているのだと信じています。

まあまあ，こんなことでしょう。いままでお話したなかには，半分ぐらい，私個人の勝手な意見がありますから，またほかの方からお話があったら違うかもしれません。その点は，あらかじめご承知願いたい。

鐘紡本社と公大紗廠の関係

〇桑原　鐘紡の本社は，鐘紡の中国における事業所を，どういうふうにして管理していたのかと。

〇堤　それは，私はよく知りませんけれども，倉知氏に任されていたと思います。

〇桑原　例えば図を描きますと，鐘紡の社長がこれだとしますと，本社の組織がその下に。

〇堤　そこには営業部というのがあるわけ。

〇桑原　工務あるいは技術。

○堤　そうです。
○桑原　それから営業とかありまして，会計か財務かというのも。
○堤　そうそう，経理。
○桑原　経理ですね。そして，この下に公大第何廠があるのではなくて，ここから本社の組織とは別に，ここに上海製造絹糸。
○堤　そうそう。上海製造絹糸。
○桑原　そして倉知氏がここに来られたわけですね。そして倉知氏のもとで。
○堤　公大一と二と。
○桑原　これは上海ですね。
○堤　この２つが上海です。
○桑原　これは綿紡。
○堤　公大三というのもある。これは天津です。それから青島工場。青島工場は五工場と言ったのかな。
○桑原　そして，この組織は，また書き直しますと。
○堤　あのね，これはここへくっついているのですよ。(公大)二は(公大)一の分工場みたいなかっこうになっている。表は独立しているけれども，内部的には。
　そして，鐘紡の組織はこうなっていて，「営業」とは言わないで「取引」と言っていたのですね。「取引」というのは「営業」のことなのです。この取引は，公大一，二を含んだ綿紡と，それから絹糸の三，これが上海の取引の管轄になるわけです。
○桑原　内地の取引が上海の取引もやっていた。
○堤　そうなのです。この取引の下に上海の取引があるわけです。その上海の取引というのは，この３つだけを持っているわけですね。工務は工務で同じように別々，そうなるのですけどね。工務は工務で，この工場の工務のあれを持つ。
　それから鐘紡では工場長というのがある。よその会社の工場長は技術者ですが，鐘紡は技術者ではないです。管理人です。鐘紡は管理人の工場長と，技師長の技術と，それから取引。それから経理というのは，管理の下にいるわけです。管理というのは，工場の管理，人間の管理，いまで言う総務にあたるような，全部の仕事をやっているわけ。工務は工

務の仕事だけをやっている。
○桑原　そうしますと。
○堤　だから管理のなかには人事もありますし，いろんなものがそこに入っているわけです。ですから経営のことは取引がやる，工場の工務に関することは工務がやる。それ以外のものは，いわゆる工場長がやるわけです。「管理部」なんていう名前はなかったですからね，工場長だけで。ですから，かたちから言うと，工場長があって，その下に取引もあれば工務もあるわけですよ。工場全体を代表しているのは工場長ですからね。
○桑原　上海製造絹糸には工場長が何人いたのですか。
○堤　公大一，二と，天津，それから青島と 4 人いるわけですね。そこで公大一の工場長が倉知さんなのです。実際は全体の大将ですけど，表面は公大一の工場長なのです。
○桑原　公大二にも工場長がいるわけですか。
○堤　いるわけです。
○桑原　(公大)三にもいるけれども，倉知氏が。
○堤　格段の違いなのですよ。段違いの人間なのです。倉知さんよりも 10 年も後だろうな。
○桑原　公大の職員は，例えば 5 年ごとに内地の工場へ返されて，また新しい人が内地から来るというふうに，定期的に異動があったわけですか。それとも行きっぱなし。
○堤　そうはないと思いますね。
○桑原　もう昭和 20(1945)年までいた人が。
○女性　長いですね，みんな。
○桑原　そういう点では，分権的であったわけですね。
○堤　そう言ってはなんだけど，鐘紡の内地の工場で，あまり具合がよくない連中が，上海でも青島でも行ったらよかろうと思って志願して来たのだと思います。したがって，あまり帰りたがらなかったな。
○女性　そうですね。中にいれば，衣食住が恵まれていましたからね。
○堤　また日本にいるよりも，同じ職工さんでも，たくさんの支那人を使えるのですからね。
○女性　給料も良かったのではないですか。それで出るほうは，あまりいりませんものね。

○堤　ただ面白いことがあるのです。田舎の工場から来た人の奥さんが，私たちがいたところは，うちの前にドブ川があって，きれいな水がどんどん流れていたと。その水を使って洗濯もできれば，何でもできた。上海に来たら水道だと言うのだね。その水道も汚い嫌な水道なの。しかも高いから節約しろ，節約しろと言われる。私はもう，こんなところは嫌だと言うのだな。そういう実際の話があるのですよ。

それはまだ，中国人のほうが日本人より純情ですからね。なにしろ会社がボーナスをくれるでしょう。そうすると，ボーナスをきちんと袋に入れて，いったんうちへ帰って，奥さんに見せて，神棚に上げて拝んで，それをまた会社へ持って来て預ける。最初から預けないのだ。預けるのだけれども，一度うちへ持って帰って，奥さんに見せて，そして神棚に上げて，それからまた会社へ持って行く。

なぜ会社へ持って行くか。会社へ持って行くと，銀行よりも利息がいいのです。だから銀行へ預けるよりも会社へ預ける。会社にしてみれば，こんな面倒くさいことをしなくても，最初から預けてくれればいいのに。それなら紙にボーナスはいくらと書いてと。だけど，それでは承知しない。やっぱり「現金（げんなま）」をね。それくらいの，まだ人情の素朴な時分ですから。

○桑原　倉知氏は上海製造絹糸の専務取締役か何か，役員であったわけですね。

○堤　ええ。

○桑原　そして本社の工務部長と言いますか，技師長と言いますか。

○堤　技師長。

○桑原　鐘紡は「工務部長」ではなくて「技師長」だったのですか。

○堤　「技師長」と言っていましたね。

○桑原　そうしますと，この技師長は公大一，二，三の技術者に命令をする権利はあるのですか。

○堤　あるのです。技術に関する限りは。

○桑原　本社の取引課は。

○堤上　上海の取引に命令ができる。ですから今日，綿布を100俵売ったと。

○桑原　上海でですね。

○堤　ええ，上海で。そうすると，それを神戸の取引に電報で報告する

のですね。すると「おまえ，そんなに安く売ったらいかんじゃないか」と言ってくることがある。
○桑原　そして，ここの公大一，二，三，青島で，青島と上海とでは，また。
○堤　対等な関係です。
○桑原　対等な関係ですね。
○堤　ある意味で対等でありライバルなのです。上海取引と青島取引というのは，かたちは倉知さんにくっついているけれども，実際は神戸にくっついているのです。それでここの人事は神戸の，つまり取引とは井上さんが持っていたわけですね。あいつを替えようと思ったら，そのことを，すぐに倉知さんのところに言っていけばいいわけです。だから，かたちは倉知さんがすることになるけど，事実は神戸がやっているわけです。その点は，すべて同じです。技術についても，経理についても。
○桑原　組織図で言いますと，技師長が命令するには，まず社長のところへ，こういう命令を公大第一に出したいですと言って，社長が命令を出してもいいと言ったら，社長からこちらへ来て，倉知氏が命令を社長から受けて，倉知氏から，また公大一の技術者に行くと。そういう組織図の関係になるわけですね。
○堤　そうそう。
○桑原　しかし，こちらに直接，命令できるのですか。社長の判がいるのですか。
○堤　いわゆる本当の命令というものは倉知氏を通ってきます。つまり社長から，そちらへ来るわけです。例えば技術上の問題で，ああだこうだということがあって，おまえのほうがやっているのは少しよくないぞと，こういうふうにしろというようなことは，直接，技術者同士で話し合うわけですから。
　そして，そういうことのために，年に１回ぐらい，打ち合わせ会が神戸で開かれるわけです。
○桑原　上海製造絹糸のなかの組織は，先ほど工場長と営業との関係を言われましたけれども，例えば，またここに上海製造絹糸を書きますと。
○堤　工場長がキャップですよ，要するにね。
○桑原　これが倉知氏で，そして，これがこうなって，これが営業で，これが工場で。いや，これがここで，公大一，公大二，公大三，営業所。

これは上海の組織図ですね。

そして，これが青島のほうで，青島のほうは，こう工場長になって，公大五で，そしてこちらに。

これだけが上海の組織だとしますと，営業所と工場長とは対等の関係にあるわけですか。

○堤　これは営業ですか。

○桑原　ええ，これは上海の営業所です。

○堤　営業は営業に関する限り，工場長よりも離れているわけです。しかし，営業に関しない，例えば人事とか，あるいは人間の素行とか，そういったようなことは工場長が握っているわけです。営業の経営そのものは，工場長はくちばしを入れられない。しかし，人間そのものが悪いことをしたとか，女関係があったとかというようなことは，これが見ているわけです。これが管理人ですからね。営業そのもののあれについては，文句は言おうと思えば言えますけど，それは，ただ文句を言うだけの話で。

○桑原　そうすると，この公大一の長は，実際の工場の操業について，技術についてのみならず，人事と経理，コストがどれだけで売上がどれだけであるか，この経理ですね。工場長が，これだけを見るわけですね。営業は，この取引だけですね。

○堤　仮に操短をすると，景気が悪くて生産を減らさなければならないというときにはどうするか。それは非常に大きな問題だから，みんなで相談します。しかし決定権はどこにあるかというと，ここですね。これはどこへ命令するかといったら，取引に命令する。

○桑原　操短の場合ですね。

○堤　二割操短しろという命令は，どこへ来るかといったら，工場長へ来るのではないのです。取引に来るのです。つまり二割減らすということは経営の一つの方法ですよね。だから工場長には関係なしに，命令はどこへ来るかと言えば，取引に来る。取引は，上からこういう命令が来たから，工場の操業を二割減らすと。どういうふうにするかということを，今度，実際にするのは工場長と技師長が決めるわけですね。

○桑原　よくわからないのですけど，操短の命令は営業所長に来ますね。営業所長は工場操業。

○堤　各工場に通達するわけです。
○桑原　そうすると，こちらのほうが権限は上ということになるのですか。
○堤　まあ，そう言えばそうでしょうね。実際問題は，そうなるまでにいろいろ，お互いが相談するからわかっているわけです。だけども，かたちということになると，いま言うように，上からどこへ来るかと言えば，取引に二割操短しろということを言われるのです。

私が上海にいるときに，神戸から操短しろと言ってきて，最初の電報は間違って五割操短という暗号が出たのです。そして後でだんだんわかったら二割だった。そういうことがあるのです。
○桑原　上海で操短ということはあったのですか。
○堤　ええ，ありましたとも。
○桑原　それはどういう理由ですか。
○堤　つまり市況が悪くて。
○桑原　内地では日本の紡績の操短というのは有名ですけど，上海でも操短をやる。
○堤　やはりありましたよ。
○桑原　それは売れなくなったときですね。
○堤　製品が消化しないのですね。例えば中国の内乱で，奥地で戦争を始めていると，どうにもしようがないのですよ。品物が奥へ行かないですからね。そういうときに問題があって，戦争がすむまで待とうというような。
○桑原　それは（在華日本紡績）同業会が二割操短というふうに。
○堤　そうではなしに，それは全体が相談してやることもあるし，いま言うように鐘紡なら鐘紡が先に操短すると，鐘紡がしたのなら，うちもやろうと言って，みんな事実上は結局やりますよね。
○桑原　では日本の内地のように，いわゆる決議操短ではないということですね。
○堤　そうです。決議操短したことはありません。任意操短しか。
○桑原　内地の技師長と上海の工場の技術者との関係は，結局，スタッフの関係になるわけですね。それで技術サービスを与える。
○堤　技師長とか技術者の相当な人たちは，ここから転勤して来たのに，また向こうの工場へ帰ったり，しょっちゅう出入りしていますから，ほ

とんど内輪同士みたいなもので，よくわかっているわけなのです。
○桑原　東洋紡なんかの場合は，裕豊紡績というのがありましたけど，あれに任せきりで，内地の工務部長は裕豊紡績の工場長には一切の口出しをしない。内地にいた東洋紡の営業部長も，上海の営業所長には一切の口出しをしないと。上海には営業担当の常務取締役と，技術担当の常務取締役がいて，それは社長直結で，内地の組織とは全く別の関係であると。そういう意味では鐘紡は少し違うわけですね。内地との関係が，もっとあるから。
○堤　鐘紡（関係の在華紡である公大と上海紡績）は，表面は独立した会社に見えていて，実は一つも独立していたわけではないのです。だから上海紡績に３年いたからといって，その勤めた期間は本社で勤めたと同じ計算をしてくれるということで，分工場と少しも変わらないのですよ。
　東洋紡は，菱田(逸次)という私の先輩が大将なのだが，これが。
○桑原　元気な人らしいですね。
○堤　これが頑張り屋で，本社でものを言っても聞きはしないのですよ。だから仕方がないから，なにも東洋紡が方針として，会社のポリシーとしてしたのではなくて，菱田くんが自分でやってしまったのです。菱田くんは自分が来て工場を建てて，すべてやって，だから技師長でも何でも彼に気に入られないのはいられないわけです。
○桑原　上海では操短は何年ぐらいにやったのですか。鐘紡は何年ぐらいに。そう，たびたびでは。
○堤　私が覚えているのでは，二割の操短を３カ月ぐらいやったでしょうかね。
○桑原　操短という経験は，それ１回ですか。
○堤　私は１回しか覚えていない。
○桑原　それは，たぶん昭和７，８(1932, 33)年ごろですね。第一次上海事変のころですね。
○堤　原因は内地の軍閥の，たぶん毛沢東のあれだと思います。つまり共産(党)軍と，国民(党)軍の蒋介石とのいろんな問題が当時はありましたからね。

在華紡の職員としての生活

〇桑原　それで外地勤務の手当は，内地勤務の場合の給料の何％つくのですか。外地勤務者は。

〇堤　どうだったか覚えていないな。

〇桑原　外地勤務手当というものが，あったことはあったのですね。

〇堤　あった。いわゆる在外手当で，上海勤務はいくらということになっていたと思いますがね。だから上海から日本の工場へ帰ったら，そんなものはなくなってしまうわけ。

〇女性　だから，あまり行きたがらない（笑）。それで，わりあいと工場や社宅にいると，出るほうがいらないのですよね。じっとしていれば，それこそね。それで工場みたいな安く買えるところがありましたし，相当優遇されていましたね。社宅も立派な社宅を，ほとんどただではないのですかね。払っていたのでしょうか，みんな出してくれますし。

〇桑原　伊藤淳二[21]氏のお父さんも鐘紡だったのですね。

〇女性　そうです。

〇堤　上海にいた。

〇女性　係は何でしたか。技術屋さんではなかったよね。なにしろ，うちのお隣だったのですよ。それで一緒に，それこそ，どちらがうちだかわからないようにして一緒に育ったのですよ。みんな社宅なので，全部なかは筒抜け（笑）。どこの家でご飯を食べているかわからないぐらいで，みんな小さいころは。

〇堤　それから実際に操業してからだいぶ日がたったものですから，日本から来ている本格的な社員のほかに，現地雇いがたくさん増えているのですよ。

〇桑原　現地採用の人ですね。

〇堤　日本人ですよ。例えば琉球あたり，いまの沖縄からたくさんの人が。沖縄の人が上海にはいっぱいいるのです，何千人と。これは日本人に違いない。そういう人が臨時雇いのようなかっこうで入っていて，そのままずっといる。昔の琉球は，生活が苦しかったらしいですので，そういう人が親類をみんな上海へ呼んで来たのです。

長崎から二晩で来るのですからね。みんな下駄を履いて，風呂敷包みを持って来るのだから。東京へ行くよりも上海のほうが近い。

○女性　たしか値段も安かったですよ。汽車賃と船賃と，弟がよく来ていましたけど，どうも上海から長崎に帰るのは安いのではないかな。

他の在華紡について

○桑原　そのほかの鐘紡以外の会社について気が付かれたような特徴というのは何かありますか。大日本紡のやり方はどうだ，東洋紡のやり方はどうだとか，気が付かれた点は。

○堤　何かあなたのこれに，日華紡と東華紡がつぶれたと書いてあるけど，あれはどういうことなの。

○桑原　日華紡は 1940 年に倉敷紡に株の過半数を買収され，東華紡は 1944 年に日華紡に買収されて消滅したということです。

○堤　ああ，そういう意味で。

○桑原　商社系は結局，最後まで残ったのは上海紡織だけでした。

○堤　日華紡の元は日本綿花だ。これに富士紡がくっついて，上海に綿糸の工場をつくろうとして日華紡ができたわけ。それで営業のほうは日綿から人が行き，技術面は富士紡から行きました。それから工場長にあたる人は，いわゆる管理の部門をやる人も，たしか富士紡から。中津の人で何とかと言った。

　それから日華紡は，どうしてもうまくいかないのですよね。それで長いこと苦しんで，それから東華紡は少し小さすぎるのでね。東華紡はどこの系統かな。

○桑原　初めは，大阪の帝国綿花という会社が中心になって資本を出した。結局，あれも商社系の在華紡です。

○堤　そして上海で 3 万錘かな，あれでも。

○桑原　あれはだいたい 4 万 5,000 錘ぐらいで，最後まで伸びなかったのですけどね。

○堤　それで結局，日華紡も東華紡もうまく日が当たらないのだね。

○女性　日華紡は田辺(輝雄)さんじゃないですか。

○桑原　ええ，田辺さん。

○女性　ねえ。田辺さんですよ。

○桑原　業績が悪かった会社と良かった会社の違い，その原因はだいたいどんなところだと思われますか。

○堤　当時はコンプラドール[22]という制度があるのです。つまり中国人の下請け会社みたいなものがある。それは相当な資金を持っていて，会社でつくったものは，コンプラドールが買って売るのが普通なのです。しかし，そのコンプラドールにも良いのと悪いのがあって，悪いのにぶつかったのだろうと思うな。
○桑原　それが一つの原因ですね。
○堤　そう私は見ているのですよ。
○桑原　それで紡績系の，例えば鐘紡の場合でも，大日本紡の場合でも，やはりコンプラドールを使っていたわけですか。
○堤　コンプラドールを私たち鐘紡も，東洋紡あたりも使わないだろう。東棉を使っていた。東棉にコンプラドールの仕事を全部させた。つまり当時は東棉と日本綿花と江商に売っていくわけです。
○桑原　そうすると，日華紡と東華紡というのは東棉とかに売らなかった。
○堤　それにも売ったけれども，どうもコンプラドールを使って，中国人に高く売れるというのでやったのではないかと私は思いますがね。
○桑原　中国人のコンプラドールも使ったと。
○堤　そのコンプラドールが悪かったのではないかと思う。つまりコンプラドールが，自分が食ってしまったの，会社をね。私たちは東棉，江商を使う。自分たちもみんな，コンプラドールを使っているのですよ。でも，これは商社だから，商社の責任でやってくれている。
　それでコンプラドールというものを使わなければ，中国では，商売はできないのですよ。実際の商売というのは。日本で言うと大問屋から，関係の商売人に物を売っていくことでしょう。このコンプラドールを除いて，いきなりそこへ行こうと思っても相手にしてくれないの。そういう点は非常に商業道徳がやかましい国ですからね。
○女性　歴史がある。
○桑原　取引経路が，それだけ複雑でもあるわけですね。
○堤　非常に複雑ですよ。だから工賃にコンプラドールの費用を加えて，ものが高くなっている。それで，いまのコンプラドールというのは，よほどいい人でなければ使うのが難しい。これは相手が日本人だから，あるいは相手が英国人だからというわけではなしに，自分さえよければ良いと考える人たちです。そのかわり，有能な人間がたくさんいましたね。

○桑原　例えば大日本紡は，技術的に最も優れていたという特徴があったとか，鐘紡は何々に特徴があったとかという点で，お気付きになったとか。
○堤　ありませんね。
○桑原　特別にそういう点は。
○堤　ということは，つくっているものは，みんな同じなのです。
○桑原　品質的にも。
○堤　それ以外のものをつくっても売れないのだから。「細布（さいふ）」[23] という言葉を使っていますが，細布はどこの細布も同じ番手で織ったものなのです。これは20(番手糸)と20(番手糸)の布ですよね。これを細い布と書いて「細布」と言いますが，これが中国人の着物の全部です。これ一色しかないのです。
○桑原　だから全部，細布を。
○堤　これより上等品となると40番手を使った，いわゆるポプリン[24] ではないけど，ポプリンに近い品物，これが着物のよそ行きに使う生地です。この二色しかないのです。だから二色しかいらないのですよ，中国の着物には。あと繻子だとか，いろいろなものがありますけど，そういうものは手機で，田舎で自分たちがつくるのです。例えば黒いスカートなんていうのは，ほとんど田舎の百姓が兼業でつくっているのですね。それが出てきている。これらの織物の原料糸も紡績がつくっていて，またこの糸が売れるのです。これでもって，紡績のつくっている布に似たものを，みんな田舎でつくっているのです。とにかく何億という人間でしょう。1インチ増えたら大変なものなのですよ。
○女性　だけど，この出てくる布は染めていないわけでしょう。未晒でしょう。
○堤　これはみんな染めていない。染めるのは，みんな田舎へ行って染めます。
○桑原　田舎へ行って染めるわけですね。
○堤　そこで，染めるためにどうするかというと，染めというのはこういう地面に，壺の中に，こうやって入れるでしょう。そうすると，この布の長さというものは，それで決まってくるのです。布の幅は着物をつくるときの一番条件がいいもので，いまは覚えていませんけど，その幅

に織ってある。布の長さは，染めるときの染めの壺の中に出したりするのに，長すぎたら大きくて染まらないし，短いと。だから布の長さは決まっていますよね。例えば満洲に行くのは何ヤード，モンゴルのほうへ行くのは何ヤードと決まっているのです。それを注文してきますよ。

その仕事は大変なものですよ。製品そのものは非常に簡単だけど，荷造りだとか，例えばそういったものが面倒なの。

〇桑原　重要ですよね。

〇堤　それでベール（梱）に鉄の玉が入っていますね，バンドが。ベールにバンドをつけてある。このバンドが，どこへ行くのは5本，どこへ行くのは7本と，いろいろ決まっているのです。

〇桑原　そんなこともあるのですね。

〇堤　例えば10本あると，7本のところに行くときは，問屋のやつは会社の倉庫に来て荷物を引き取ると，せっかく付いている3本のバンドを切ってしまう。その3本は自分の儲けなのですよ，来たやつの。

〇桑原　これが一つの在華紡経営の特徴ですね。製品は同じだけれども。

日本の紡績の技術面での進歩

〇堤　このほかにジーンズがあります。綾織物。このジーンズは女のスカートや何かに使うのです。それから綿糸は16，20，30，40（番手）ぐらいでしょうね。

〇女性　私なんかもそばにいるけど，本当に話を聞いたことはあまりない。

〇堤　私は一度，上海のジャーディンの工場（怡和紗廠）へ遊びに行ったのですが，そこに英国から来ている技師長がいる。その技師長は，当時だいぶんな歳でしたね。その人にいろんな話を聞いたのですよ。

その人は，元鐘紡の雇われ技師だったのです。そういう関係で，その人に会って話を聞いた。日本の紡績と中国の紡績，つまり中国人の職工とはどう違うのだと聞いたのです。そうしたら，その技師がこう言った。中国人はだめだと。「おまえはこれをこうしろ」と教えると，「ああ，そうですか」とやる。ちょっとこっちを見ていると，もうやめている。

日本人は「おまえ，これじゃいけないからこうしろ」と言うと，「いや，俺のやり方のほうがいいのだ。しかし，おまえがそう言うのなら，どういうわけだ。その理由をはっきりしてくれ。そうしたら俺はやる。さも

なければ，俺はいままでこうやっていたのだから，これでやる」と言うと。そして日本人は，とことんまで突っ込んできて，それで話が決まったら，見ていようと見ていまいと，そのとおり，きちんとやると。

これが日本人と中国人の違いだと。だから中国はだめだよと。日本は，これからいくらでも発達する。中国は，もうこれでおしまいだと。そういうことを，その英国の年寄りの技師が言いましたよ。これはお世辞でも何でもないと思う。実感からきたものだと思う。

（音声中断）

○堤　英国のメーカーのプラットは「おまえ，この機械は１万回転超したら壊れるぞ。だから決して早く回したらいかん。早く回したら回すだけ命が短くて，機械が悪くなるから」と言う。それで日本は，明治30（1897）年から，それを正直に守っていた。

ところが昭和初期の経済危機で，なかなかそんなことをのんきにやっていられない。なんとか飯を食わなければいけない。壊れてもいいから回してみろというので，１万回転回した。どうもならない。とうとう１万5,000回転まで回した。だけど，少しも壊れもしなければ，どうもならない。それでプロダクションが，がっと増えた。

そこで日本は，よしと。もっと早く回しても壊れない機械をつくったらいいではないかと。そういうのを豊田さんが始めたのですね。豊田さんが織機を研究して，それからそういう紡機の研究をして，そして日本でできたのが豊田式の紡機。これは回転数が早い。そうすると，イギリスやフランスの紡績は１万回転しないのに，日本では２万回転もするから，１万錘が２万錘にあたるわけ。そこでコストが下がってきた。それで，どんどん日本は発達しだしたわけだ。

○桑原　その１万回転しか回せないと言われて，１万回転以下の速さを守っていたのは，いつごろの話ですか。

○堤　私の記憶では，私が鐘紡へ入ってからのことのように思うのですけどね。ですから，むろん昭和に入ってからだと思うな。昭和のごく初めごろではないかと思うのですよ。

イギリスの綿業が衰微したのは，いまの１万回転をしたら壊れるので，それ以上早く回さないことを真面目に守っていたからだ。それで，とうとう50年も80年も同じ機械を使っていた。スクラップにすることをし

ないで。だから，どんどん能率が下がってしまった。それで世界の綿業界からイギリスは追い出されたようなことになった。

日本は，それを早く知って，古い機械をどんどん中国へ持って行ったわけです。しかも，それがこんにちまで残っているわけです。

中国紡織建設公司への留用

○堤　終戦後1週間ぐらいのときに，重慶政府から電報が来て，私に帰るのを待ってくれと言ってきた。そして1週間ほどしたら，重慶から偉い人が来たので会ったのですよ。すると，日本の紡績と中国の紡績が合同して，一つの会社をつくって経営していこうという話が，いまワシントンで進行していると。それについて，どうかあなたの援助がほしいと。できるだけ日本の紡績関係の技術者を残してくれという話だったのです。私も，話はだいぶおかしいには違いないが，いい話だからと思っていたのです。

しかし，それから1週間ほどしたら，がらっと話が変わった。紡績を全部接収するという。そして中国が日本の紡績を接収して，国営の会社をつくった。そこで私に技術者をできるだけ残してくれというので，私が方々の会社で残りたい人を募集したたら，150人ほど残るという。そして私は，この技術者を連れて，終戦後3年間残っていた。その技術者は，まだ2，3人上海にいます。もう80歳になった。

○桑原　豊田の西川秋次さんなども残られたということが書いてありました。

○女性　西川さんは亡くなりましたよね。

○堤　そして，その接収の状態その他について，私は大阪の紡績協会に報告を出した。それが紡績協会の当時の月刊誌に出ているはずです[25)]。紡績協会へ行けば，すぐわかると思います。昭和20(1945)年10月ごろの雑誌だと思うけれども，おそらく当時，紡績協会の雑誌も，その時分が終戦後の第1号ではないかと。

安達春洋について

○堤　ところで，それは何なのですか。この本は。

○桑原　この本は昭和10(1935)年の本で。

○堤　何か紡績に関する。
○桑原　ええ。安達春洋[26]という人の本です。
○堤　ああ，安達春洋。よく知っていますよ。
○桑原　ジャーナリストだと思いますけどね。
○堤　それは，いまでもあると思うけど，方々の紡績に行っては金を取っている人です。
○桑原　そうらしいですね。
○堤　金を余計にやらないと悪口を書くの。それだから利口な人は，これにうんと金をやるの。そうすると，うまいこと書いてくれて，社長さんがそれを読んで，「おお，あいつ，そんなか」というようなものでね。
○桑原　ああ，そうですね。
○堤　これは課長ぐらいから上を克明に行くのですよ。そして金を絞っていくのです。
○桑原　そういう人ですか。
○堤　私なんか，ばか正直な人間だから，そんなことをするのが嫌いなのだ。こいつにあまり金をやらないものだから，大していいことは書かない。
○女性　だいいち来ないでしょう，初めから。
○堤　こいつは実に悪いやつだ。各社の内輪のことを全部聞き出す。それで，酒を飲ませたりなんかをして，職工やなんかも抱き込んで，裏話をみんな取っちゃうのだ。今度はそれを上のほうへ持って行って金を絞るのだ。
○桑原　この人の本職は。
○堤　新聞記者ですよ。新聞記者の崩れたやつだね。
○女性　まあ，いろいろな生き方がありますものね，いろんな世の中の。
○堤　それが一匹狼なのだ。そういうのが紡績なり繊維関係で３人ぐらいいた。そいつが年に定期的に回ってくる。ああ，またあいつが来たなと。
○桑原　それはどういう人ですか，名前は。安達さんのほかに。
○堤　いまは覚えていません。安達だけは，よく覚えています。
○桑原　この本は神戸大学にも一橋にもないのですよ。
○堤　そんなもの，私は見たことがないがなあ。
○桑原　それで紡績協会で見つけたのです。たぶん，学者はこの本を重要

ではないと思ったから買わなくて，図書館に入れなかったと思うのです。
○堤　それは，そういう内幕が書いてあるのですから。
○桑原　僕らには非常に参考になる本なのですけどね。特に経営史という立場で，各企業についてやっているもので。
○女性　菱田さんが出ていましたよ。川邨さんも出ているし，福庭(孝)[27]さんが出ているし，私の知っている人がだいぶ。
○堤　井上さんも出ている。
○女性　もちろん井上さんは大きく出ている。
○堤　ああいうところは，だいぶ金を出しているよ。当時の金で1,000円や2,000円ではないよ。それは，いまで言うと何十万円という金になる。
○女性　だって，それで生きていらしたのでしょうからね。
○堤　それを出さないと悪く書くから困るのだ。　（終了）

註

1）　奚玉書は，上海の人で1902年生まれ。22年に復旦大学商科を卒業し，続いて東呉大学法学院（現蘇州大学）で3年間学んだ。27年に会計師免許を取得するとともに，上海会計師分会の常務理事をつとめた。34年には上海公共租界の理事に当選し，日中戦争中の38年には上海難民協会の理事兼会計に任じられたが，41年の日本の租界占領により重慶に逃れた。42年及び45年には第三・第四届国民参政会参政員に選出され，戦後の1946年11月には上海臨時参議会副議長，上海市政府主席顧問，上海市政協理事長などに任じられるとともに，制憲国民代表大会代表に選出され，1948年の憲政実施後には立法委員に任じられている（徐友春主編『民国人物大辞典（増訂本）』河北人民出版社，2007年，1255頁）。

2）　堤氏直筆の履歴書，上海市档案館Q192-18-77。なお中紡留用時の堤氏は，「関於大型紗廠（有紗錠一百万枚以上者）経営方案提出之原委」1946年7月23日（原題「大会社ノ運営方法ニ就テ」），「経営接収日資紗廠之芻議」（原題「接収日本紡績工場ノ運営方策ニ就イテ」），「関於青島接管日資紗廠経営意見書」，「関於天津接管日資紗廠経営意見書」などを東雲章中紡経理に提出している（大阪大学所蔵日本紡績協会資料Ⅱ-1-22-217「接収後の状況」）。また在華日本紡績同業会在職時のものとして，堤孝『中國に於ける紡績工業に就いて』在華日本紡績同業会上海支部，1940年がある。

3） 倉知四郎は, 1878 年に大分県に生まれ, 1906 年慶應義塾大学政治科卒。07 年鐘紡に入社，上海の鐘紡公大実業の常務取締役をつとめた後，1938 年には鐘淵実業取締役，1945 年 12 月～ 47 年 6 月に公職追放の拡大により辞任を余儀なくされるまで鐘紡の社長をつとめた（中西利八『中国紳士録』満蒙資料協会，1942 年，880 頁［ただし金丸裕一編『中国紳士録』ゆまに書房, 2007 年によった］, 鐘紡株式会社社史編纂室『鐘紡百年史』鐘紡株式会社，1988 年，437–438 頁）。

4） 津田慎吾（1881–1948）は，1881 年に愛知県に生まれ，1907 年慶應義塾政治科卒業後に鐘紡に入社，1911 年には西大寺工場長に抜擢され，1929 年には取締役となり，不況下での賃下げなど合理化を推進し，1930 年には社長に就任した（同書編集委員会『国史大辞典』第 9 巻，1988 年，764–765 頁）。

5） 井上潔は 1887 年兵庫県加古川市生まれ。1910 年東京高商専攻部卒業後，鐘紡に入社，取締役・常務を経て，鐘淵化学工業監査役に就任している（『昭和人名辞典』Ⅱ第 3 巻, 日本図書センター, 1987 年, 41 頁）。

6） 前掲『鐘紡百年史』1005 頁。

7） 武藤山治（1867–1934）は，岐阜県で生まれ，1880 年に慶應義塾に入学し, 福沢諭吉から強い感化を受けた。1885 年には渡米して, バシフィック＝ユニバーシティに学ぶ。帰国後，新聞記者などを経て，1893 年に三井銀行に迎えられ，翌 94 年に鐘淵紡績の兵庫工場長に抜擢された。武藤は 1899 年の神戸の上海紡績を皮切りに合併・買収をすすめ，第一次大戦期には鐘紡を，東洋紡，大日本紡とならぶ三大紡の一つに成長させた。1900 年に鐘紡支配人，1908 年に鐘紡専務，1921 年に社長に就任した（前掲『国史大辞典』第 13 巻, 1992 年, 647–648 頁, 桑原哲也「武藤山治と大原孫三郎」佐々木聡編『日本の企業家群像Ⅱ』丸善, 2003 年，2，7–18 頁）。

8） 王一亭（1867–1938）は，中国の実業家，政治家。上海で生まれ，13 才の時に慎餘銭荘で学徒を務めながら，広方言館で外国語を学ぶ。1907 年から 20 年間にわたり日清汽船上海支店買辦となり，後に大阪商船買辦，上海製造絹糸社長を兼任した。また多方面への投資にも積極的で，瀋陽地産公司，上海内地電灯廠，在華紡上海紡織などの董事，上海信成銀行董事長を務めた。1909 年に上海商務総会議董となり，上海の自治活動に積極的に参与した。1910 年に中国同盟会に参加し，辛亥革命後には上海軍政府交通部部長などを務めたが，12 年の「第二革命」失敗後には共同租界に隠居し，絵画に専心した。中国仏教界においても，積極的な活動を行っている（前掲『民国人物大辞典増訂本』58–59 頁）。

9） 川邨利兵衛（1851–1922）は，和歌山県生まれ。大阪の綿問屋・松坂

屋に勤め，1987 年大阪紡績（東洋紡の前身）に入社，1902 年には内外綿取締役に転じ，1918 年より頭取に就任した。松坂屋勤務時代から中国市場に多大な関心を寄せ，大陸進出論者として 1911 年の上海第三工場の開設を主唱し，内外綿の在華経営発展の基礎をつくった（前掲『国史大辞典』第 10 巻，1989 年，496 頁。『内外綿株式会社 50 年史』内外綿株式会社，1937 年，47–48 頁）。

10） 菱田逸治は，1882 年に岐阜県で生まれ，1905 年東京高商を卒業後に大阪紡に入社。東洋紡（1914 年に大阪紡と三重紡の合併により設立）上海，名古屋の各支店長を経て，裕豊紡績に転じ，常務，専務を経て副社長に就任した。在華日本紡績同業会上海支部長兼常任委員などを兼任した（谷サカヨ『大衆人事録』第十四版「外地，満・支，海外篇」帝国秘密探偵社, 1943 年, 支那 115 頁［ただし『昭和人名辞典』第 4 巻，日本図書センター，1987 年による］）。

11） 庄司乙吉（1873–1944）は，秋田県で生まれ，東奥義塾で約 1 年英語を学んで上京，1897 年に東京高等商業同専攻部領事科を中退して，大日本綿糸紡績同業連合会に就職，孟買（ムンバイ）出張所に赴任し，1900 年帰国して書記長となった。1912 年に退職し大阪紡績支配人となり，17 年に東洋紡績（大阪紡績の後身）取締役，35 から 40 年まで同社長を勤めた。この間，韓国棉花常務，昭和レーヨン副社長，裕豊紡績社長などを勤めるとともに，37 年には日米綿業会談・日蘭民間会商の日本側代表，35 から 39 年には大日本紡績連合会委員長・会長を勤めた（前掲『国史大事典』第 7 巻，1986 年，518 頁）。

12） 1897 年操業開始の怡和紡織のこと。怡和紡織は，1914 年に香港より設備を上海に移転させて作った楊樹浦工場，1918 年に買収した公益工場などを加えて設備を拡大させている。

13） 1925 年 10 月 26 日から開催された北京関税特別会議のこと。この会議の主目的は中国政府の歳入増加のために，関税率改訂と関連事項の取り決めをなすことにあったが，北京政府末期の混乱により，翌年 7 月 3 日に無期休会となった。

14） 上海には 1927 年以降，特別海軍陸戦隊として日本海軍の地上部隊が常駐していた。

15） 秦の始皇帝が造営したと言われる巨大な宮殿。

16） 中華民国期のチャハル・綏遠両省および山西北部の呼称。

17） 専論として，河端正規「山東牛貿易の研究―青島守備軍の輸出政策とその権益」『社会システム研究』（立命館大学社会システム研究所）第 16 号，2008 年がある。

18） 正しくは華中棉産改進会。同会は，日本の傀儡政権である中華民国

維新政府と興亜院華中連絡部の調整下で，長江中下流域の綿産の指導奨励機関として 1939 年 6 月 17 日に設立された。総裁には梁鴻志維新政府行政院院長，副総裁には永田秀次郎日本棉花栽培協会会長，会長には王子恵維新政府実業部長，副会長には小寺源吾日本棉花栽培協会理事長および沈龍毅維新政府実業部次長，理事長には船津辰一郎在華日本紡績同業会総務理事，常務理事には堤孝在華日本紡績同業会理事および徐耿庶維新政府実業部農林司長が就任した。また理事や幹事には，棉花統制委員会副主任委員として菱田逸治裕豊紡績副社長，黒田慶太郎上海紡織会長などの在華紡経営者，棉花収買同業協会理事長として江上達（常州）民豊紗廠経理，楊翰西（無錫）広勤紗廠経理などの江南の中国紡経営者が就任した（『華中棉産改進会要覧民国 33（1944）年 6 月現在』上海市档案館 R13-1-253）。

19）「華中棉産改進会会則」の第五条には「本会の経費は維新政府からの補助金および日中関係者の捐輸（献金），その他の収入をこれに充てる」とある。また「華中棉産改進会設立要綱」の「経費」の部分でも同様の記述があるが，経費の具体的な額や負担者については不明である（「上海特別市政府訓令政字 168 号」1939 年 9 月 25 日，上海市档案館 R18-1-416）。

20） ここで堤氏の言う徳字綿は米綿種の総称と思われる。1944 年度に華中棉産改進会の分配綿花種子合計 23,042 担の中で「南京徳字棉」は 1,752 担に過ぎず，大部分は「金字（キング）棉 380 号」（10,328 担）と「本地陸地棉」（10,000 担）により占められている（前掲『華中棉産改進会要覧民国 33（1944）年 6 月現在』）。

21） 伊藤淳二（1922–　）は中国青島市生まれ，1947 年慶應義塾大学卒業後に鐘紡に入社。68 年に社長に就任し，事業の多角化を推進した（前掲『鐘紡百年史』）。

22） コンプラドール（comprador）は，ポルトガル語で購買者・買付商の意味であり，「買辦」と訳される。買辦は清末以降，中国にある外国商館，領事館などが，中国商人との取引の仲介手段として雇用した中国人のこと。この意味が転じて，外国資本への奉仕によって利益を得，自国の利益を抑圧するという意味も持つようになった。

23） 細布とは，シャーチングであり，平織綿布のことである。当時の中国においては，これを染色した後に上衣として使用した（井村薫雄『紡績の経営と製品』大阪屋号書店，1926 年，140–142 頁）。

24） 糸染綿布の一種で比較的細番手糸を使用した。

25） 堤孝「中国紡織建設公司の近状」『繊維月報』第 5 巻第 11 号，1948 年と思われる。

26） 安達春洋は，本名安達和，繊維業界ジャーナリストであり，その著作には『紡績界の横顔』私家版，1931 年，『紡績界の展望』私家版，1932 年，『国際情勢と我が繊維界の陣営』私家版，1935 年，『津田積極政策と鐘紡の将来』繊維評論社，1938 年などがある。

27） 福庭孝は，1893 年に島根県で生まれ，1917 年に明治専門学校（現九州工業大学）電気工学科を卒業し，26 年に東華紡績に入社，動力主任などを経て，41 年から工場長（前掲『大衆人事録』第十四版「外地，満・支，海外篇」支那 121 頁）。